

マルクス学位論文における自然哲学の再解釈
——エピクロスの感覚主義を中心として——
加戸 友佳子(神戸大学・博士課程)

本報告は、エピクロスの感覚主義を、マルクスの学位論文『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』を素材として考察し、近代の科学の認識論について一定の示唆を得ることをめざす。

近代の科学的認識論は、客観と主観を峻別し、主観を排除して客観的真理を追究するものとして捉えられがちである。こうした認識論は、デモクリトスのそれと親和的である。しかし今日、こうした認識論に対し、様々な疑義・異議申し立てがなされつつある。それは科学的認識論のレベルにとどまらず、現実的な社会問題においても問われている。例えば原子力発電所の事故・再稼働などをめぐる見解の相違や対立は、はたして「客観的真理」を争うものなのか。客観的認識の深まりや科学的知識の普及は、「正しい」回答・合意を導き出すのか。そして客観的・科学的認識において一般に市民よりも専門家の方が優越しているとみなされることが多いが、それは本当なのか。

マルクスは1841年、自らの学位論文においてデモクリトスの認識論を批判し、これと対極にあるエピクロスの認識論を高く評価した。私達は今、マルクスやエピクロスの認識論から、何を学び取るべきなのか。

マルクスの学位論文をめぐっては、従来、大きく4つの立場からの研究が蓄積されてきた。

第1は、山中隆次・城塚登・正木八郎・黒沢惟昭等、1970年代までを中心とする一連の研究である。ここでは、『資本論』など後のマルクスに結実する人間の主体性の把握の萌芽、いわば「未熟なマルクス」として学位論文の意義・到達点が読解されている。

第2に、晩期アルチュセールなどの構造主義的解釈である。ここでは、人間の主体性それ自体が作られたものであり、1970年代までの研究のように主体性の起源を自然や自然認識に求めることは、観念論であると批判される。

第3に近年、工藤秀明、J.B.フォスター等、人間と自然の関係を問うエコロジー思想としてマルクスの学位論文を検討する研究も試みられてきた。ここでは自然と人間の連続性の中で、人間の主体性が自然のそれへと拡張して把握されている。

そして第4に、エピクロスの自己認識とマルクス自身のそれとの関係性を問う荻原理の研究である。ここでは、マルクスがエピクロスの最大の理解者として、エピクロス自身の自己矛盾・帰結をも暴く冷徹なまなざしの持ち主と捉えられている。

本報告では、これらの先行研究をさらに批判的に検討し、マルクス学位論文の論点、およびその現代的意義を確認したい。そして、①自然の必然性、決定論的説明を克服した認識論を創造すること、②決定されない人間の主体性・自己意識を、それを把握する知的探求者自身の主体性・自己意識をも対象化する形で把握すること、③自然一般ではなく、あくまで人間に固有の主体性・自己意識を重視すること、そして④エピクロスやマルクスに依存して本質を語ることの限界とその克服の展望といった諸点を確認・検討したい。